菅野博史教授のご退職に際して

松　森　秀　幸

本年３月をもって、菅野博史先生が文学部をご退職になります。1988年、文学部に哲学・歴史学の研究領域を扱う人文学科が開設されました。先生は、1986年に比較文化研究所の客員研究員として本学に赴任されて、人文学科の開設にご尽力なされ、人文学科の開設以降は、文学部の専任教員として、現在まで教鞭をとってこられました。私自身、1999年に菅野先生のゼミに所属して以来、ご指導いただいてきた学生の一人であり、先生に対する感謝の気持ちを言い尽くすことは困難ではありますが、この機会を借り、先生の業績の一端をご紹介することによって、わずかではありますが先生への謝意を表したいと思います。

先生は、東京大学文学部をご卒業後、同大学大学院に進学され、1984年に単位取得退学なされました。その後、東方研究会の専任研究員、日本学術振興会の奨励研究員などを経て、前述のように、本学に赴任なされました。文学部に所属なされてからは、専任講師、助教授、教授を歴任され、この間、1994年には、『中国における法華経疏の研究』で東京大学より博士（文学）の学位を授与されておられます。また2001年からの８年間は、本学の国際仏教学高等研究所の所長も務められました。

先生は、本学だけに留まらず、国内外のさまざまな学術機関においてもご活躍してこられました。たとえば、東京大学をはじめとする多くの大学での非常勤講師、東洋哲学研究所・大倉精神文化研究所などの研究員、さらに北京大学や中国社会科学院世界宗教研究所の訪問学者、中国人民大学仏教与宗

教学理論研究所の客員教授、同大学講座教授、中央民族大学訪問教授、同大学東亜細亜佛教研究中心の顧問などを務めてこられました。また、日本印度学仏教学会、日本宗教学会、仏教思想学会、東アジア仏教研究会などの諸学会において責任職を務められ、日本の学術界の発展に大きく貢献しておられます。

先生のご専門は、中国において成立した漢訳仏教経典に対する注釈書の研究であり、南北朝から隋唐代にいたる『法華経』・『維摩経』・『涅槃経』などの諸経典に対する注釈書を研究しておられます。先生のその膨大な業績の詳細については、本誌に掲載された先生の業績一覧をご参照いただきたいと思いますが、ここでは、先生のご研究が中国仏教研究に与えた影響という観点から若干の補足をさせていただきたいと思います。先生は、前述の博士論文『中国における法華経疏の研究』をもとに、1994年に『中国法華思想の研究』（春秋社）を刊行なされました。本書は、鳩摩羅什門下の道生から三論宗の吉蔵や天台宗の智顗・灌頂にいたるまでの中国における『法華経』注釈書を研究対象とした大著です。中国仏教思想史研究において本書が重要な意義を持つことはもちろんですが、ここで注目したいのは、本書の論述スタイルです。それまでの中国仏教研究では、中国の仏教文献を引用する際、漢文のまま引用するという形式や、訓読という日本独自の漢文読解法を用いて引用するという形式が主流でした。しかし、先生のご著作では、漢文を引用するのと同時に、その現代日本語訳を併記するという形式が採用されています。先生のご著作は、中国仏教研究の分野において、この形式をいち早く採用した研究であり、この形式は、その後、多くの東アジア仏教研究者の間で共有されるスタンダードなものとなっています。

また先生は、仏教学の分野において、中国語を用いて、直接、中国人の研究者と交流を深めた、第一世代の研究者ではないかと思います。日本の中国仏教研究は、近代以前から蓄積された仏教研究の成果に基づき研究を行うことが多く、中国を研究対象とする他の諸分野と異なり、長らく研究者が中国語で直接、中国人の研究者とやり取りをするということは、ほぼ行われていな

かったように思います。先生は1985年以降、積極的に中国語を用いて中国の仏教学者との交流を深めてこられました。私は5年間、中国に留学しておりましたが、知り合った仏教学者は、口々に「菅野先生は自分の友人である」と述べておられ、先生が中国の仏教学界において非常に信頼されている日本人の中国仏教研究者であることを実感しました。

先生は、教育面においても大きなご尽力をしてこられました。2017年、本学大学院文学研究科人文学専攻に仏教学専修が新設されました。これは先生の多大なご尽力によるものです。また先生は、本学の学生だけにとどまらず、国内や中国人の若手の研究者や院生にいたるまで幅広く交流を持たれ、研究上の助言から日本語のチェックにいたるまで手篤く指導しておられます。私自身、学部生の時より、公私にわたりご指導いただいた学生の一人でありますが、現在、日本や中国で活躍する仏教学の中堅、若手の研究者で、先生の学恩に浴した者は枚挙に暇がないでしょう。

ご退職後もさまざまな研究のご計画があるとお伺いしております。個人的には、先生との共同研究が今後、10年先まで続く予定となっております。これまでと変わりなく後進を導いていただきますようお願い申し上げます。